

文化・芸術

「描いて彫って刷る木版画
作業を分けたり ひとりで
こなしたり」

(展示室のガイド)

2026年、アクリル、発泡ポリスチレン
パネル、高さ123cm

唐澤龍彦

現在開催中の企画展の各展示室の入り口には、このようなガイドさんが立っています。今回は、複製メディアとしての版画に注目して、大川美術館の代表的な版画をご覧いただいています。歌川広重の「狂歌入東海道」から始まっていますが、浮世絵版画は、絵師が描いた下絵を彫る彫師、刷る摺師がいて完全な分業。これに対して、画家の方から版画の芸術性を主張して「自画自刻自刷」という「創作版画」が、20世紀初めに生まれました。恩地孝四郎、棟方志功、清宮質文らは、その流れの中の代表的な版画家です。

一方で、かつての浮世絵版画の分業化された技術を、現代に生かそうと試みたのが山口晃の「新東都名所 東海道中 日本橋 改」です。これらの木版画の歴史を振り返ることができます。

(田中)

《名画の扉》

描いて彫って刷る
木版画
作業を分けたり
ひとりでこなしたり



大川美術館企画展

「いま、美術館にいるんだけど
—唐澤龍彦のコミックと大川美術館から